

## オープンダイアログの研究 そのリカバリー全体への波及効果

医療法人聖和錦秀会阪本病院 名誉院長  
桂田 俊武

### 1.緒言

open dialogue は制度的にも、治療技法としても革新的であり、更に根本的なパラダイムの変化を持ちながらも、現在の行き詰まった院内治療にもヒントを与える柔軟性を持つ事から、研究対象として取り上げた。

### 2.方法

当院から4名のスタッフが、国際支援心理センター主催の研修会に参加し、国際資格を取得した指導員の下、長期の研修を行った。更に近隣クリニックに働きかけてその二名のスタッフにも研修に参加を要請した。当病院の地域内に open dialogue を行える理解の風土を作り上げることが試みた。純粋に学問的理解にとどまらず政治的な力となることも目指して布石を打った。

半年間におよぶ研修期間中も、実践的試みを行った。

また、11月3日には、イタリアのトリエステ精神医療センター長を長く務めて、open dialogue の国際資格を取得された pina Ridente 氏によるイタリア精神医療と open dialogue の講演会を東大阪市、京都大学との共催で行った。70名以上の参加者があり、東大阪での実践に布石を打った。

### 3.結果

無事に病院スタッフ4名が長期研修を終了し経験を積む中で、実際の医療制度としての経験と、その理論的側面における知識を深めた。

社会の中にある病院としての役割についての学びがあり、それと切り離せない問題としてパラダイムシフトとしての洞察、個人の人格変化（治療者としての意識の変化）など多面にわたる学びがあった。

### 4.考察

open dialogue は、様々な要素から成り、更に未だ発展中であるといえる。まず政治的な、制度的な側面と、治療的な側面とがある。ここでは治療的側面を取り上げるのであるが、そ

れも大きな枠組みと、技法的な面とに分けて考えることが出来る。発展途上にあることを考え、その日本に於ける適用を模索している現段階では、実践を行いながらもそのパラダイムについて考察を深めたい。(技法の習得に終始して、一時的ブームとして終わらないためにも)

もともと西洋においても、ポストモダンのパラダイムの変換点にあり **open dialogue** が一つの提案をしているからこそこれだけの運動になりつつあると考えられる。それゆえに日本に適応させての実践を考えるとこの点は重要であると思われる。

ここでは、**J. Seikkula** の二つの論文を元に議論を進める<sup>1),2)</sup>。

彼は<.....私たちは、ミーティングの重心を「介入」から「対話」へ移す際に、特殊な治療法よりも、人間の基本的価値(例えば「愛」)を重んずる方向へと歩みを進めてきたのでした.....>

<.....ネットワークメンバーの言葉と感覚にピンポイントで同調することで、人間関係のいちばん基礎的な部分との共鳴が起こります.....生後間もない赤ん坊にも見いだすような、本当の意味で相互的かつ対話的な関係です。>

<.....私たちを、ともにある関係的存在として、真の意味で「人間」たらしめてくれるあの感覚です。>

そして、目指すのは、**psychotherapy** ではなくて **way of life** であるとしします。ここで、彼は「本当」の「人間」「愛」「繋がり」について述べますが、その意味するところは自明ではありません。講習において **Ridente** さんがデモクラシーについて自明であるように語られた違和感を思い出します。

斉藤環は、「人間」の再定義について述べています<sup>3)</sup>。しかし彼が取り上げているのは西洋の思想的変化であるといえます。日本において「対話」を試みるときの困難については例えば中島が述べている<sup>4)</sup>。

ここでの検討したいのは、中島のように日本の現実についてみることと、**R.Johnson**<sup>5),6)</sup> のようにもう少し大きい視点から西洋の流れを見て日本の現実と比較する視点をもつことである。それによって、日本の現実と西洋の現実を比較しやすいかと思われる。そこから **mindfulness** をどう取り入れるかを考えることが出来る。つまり西洋のスピリチュアルな次元との格闘が、いったんハイデッガーにより「非聖化」された「人間」が、いかにヌミナスな治癒力を持った次元を再獲得したのか。**Jon Kabat-Zinn** がいかに合理的的精神を持って仏教的瞑想を取り入れたか。その **open dialogue** への取り入れはその経過を必要とした。ハイデッガーが、いかに人間関係に悲惨さを持ち込んだヒトラーに加担することになったか。神聖な次元との格闘はなお続くと言わざるを得ない。

**R.Johnson** は、**solitary** と **solitude** を区別している。必要な孤独を経過して人は他者との関係を発見できる。ここでかれは、ユング心理学的な理論に基づいて、西洋の伝統のなかでの人間関係を考察している。

それゆえに **J.Seikkula** の言うような、「赤ん坊にも見いだされる関係」に戻ることはな

いだろう。「自然に戻れ」というようなかなり素朴な理論であるようにも思える。(フランス革命が、自然に戻れというルソーの理論を基盤にしていたように、この熱気を持った open dialogue の運動もその基盤を考える必要がある。)

## 5.結語

未だ成長途上の思想、技法でありノルウェーで mindfulness を取り入れ批判的に発展しているように我々も独自に深める努力が求められていると思う。その点で 5 月末に予定していた Seikkula との研修において直接上記問題の確認を考えていたが、コロナ問題で流れてしまったことが悔やまれる。

## 6.文献

- 1) J. Seikkula, becoming dialogical:psychotherapy or a way of life
- 2) J. Seikkula, healing elements of therapeutic conversation:dialogue as an embodiment of love
- 3) 斉藤環 「新しい人間主義」の潮流
- 4) 中島義道 <対話>の無い社会
- 5) R. Johnson, we understanding the psychology of romantic love
- 6) R. Johnson, inner gold